

坊っちゃん

—— 映画文学人生論

原作：夏目漱石 (1906) 「ホトトギス」
監督：前田陽一 (1977) 脚本：前田陽一 南部英夫
出演：坊っちゃん 中村雅俊 撮影：竹村博
マドンナ 松阪慶子 音楽：佐藤勝
山嵐 地井武男
赤シャツ 米倉斉加年

親譲りの無鉄砲で小供の時から

損ばかりしている

夏目漱石『坊っちゃん』は私にとっては文学とはじめて遭遇のような気がした作品だ。中学一年生の国語の授業で先生が朗読してくれた。

「親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりしている」——ではじまる坊っちゃんの行動はユーモアがあって面白い。

先生の口調には大阪なまりがあった。江戸っ子の坊っちゃんがべらんめいの早口でまくしたてるのを伊予松山の生徒が「あんまり早くて分からんけれ、もちつと、ゆるゆる遣っておくれんかな、もし」という。そのやりとりを先生が大阪なまり朗読するのを聴いて、備中の中学生は笑った。

『坊っちゃん』の面白さは方言をふくめたことばの面白さとユーモアだ。これが文学というものなら文学とは面白いものにちがいない。そう思ったが、そんな甘いものではないことをすぐに思いしらされた。

近代文学の本流はリアリズム（写実主義）とされている。戯作の要素をふくむ『坊っちゃん』のような小説はリアリズムの文学とはいえない。

坊っちゃんの初任給は月額四十円。これをリアリズムで漱石が現実的に松山中学で支給された月額八十円と比べると半額だ。安いという印象を受けるが、田山花袋の『田舎教師』が埼玉県の小学校で支給された月額十一円よりも恵まれている。

坊っちゃん

映画文学人生論



『田舎教師』は肺病になって死んでしまう。これはリアリズムだ。『坊っちゃん』は赴任一ヶ月もしないうちに同僚と喧嘩をしてやめる。月給四十円の教師から月給二十五円の街鉄の技手に転職するのはリアリズムではないような気もするが、親譲りの無鉄砲で小供の頃から損ばかりしている坊っちゃんらしいともいえる。

『坊っちゃん』に似たところがあるのは山田洋次監督の映画『男はつらいよ』で渥美清が演じるフーテンの寅さんだ。寅さんも「親譲りの無鉄砲で小供の頃から損ばかりしている」。

十六歳で父親と大ゲンカして家を飛び出し、テキ屋稼業で日本全国を渡り歩く渡世人になった。たまに故郷の柴又に帰ってくると必ずおいちゃんや印刷工場のタコ社長と喧嘩をして、また旅に出かける。美人とめぐりあうと、たちまちのぼせあがっては失恋のパターンを繰り返す。

坊っちゃんも寅さんも、単純、正直で、元気がよい。坊っちゃんについては「あなたは真っ直ぐでよい御気性だ」と下女の清がほめている。寅さんについては「お兄ちゃんはうそをついたり、人をだましたことがない」と妹のさくらが信頼している。実際にはうそもつくし、人をだますこともあり、無銭飲食を働いたりもするが、さくらの信頼は揺るがない。

なもしとは違うぞなもし花菜飯